

面

118

寒 卵

本 多 和 子

初日の出和をたまはりし昭和の子
凍滝の無言のままに流れ立つ
一と刻の降る雪と見ゆ賑々し
熱爛の坐高低きに並々と
寒卵力行ま白き一と並び
寒風にビラ貼る人のビラを読む
種袋うすき袋を振りてみる
薄氷の解けつつ雲の行方かな
路地行けば風の容に春近し
細切れの製図鮮明春ごろも

やげん堀

田 口 鷹 生

ドコデモドアケマシテ日本丸
シヤボン玉孤独太陽近付きて
新緑やたちまち想うかみのけ座
やげん堀夏へ夏へと傾きぬ
絶えて久し目礼する牡丹かな
残り香の金木犀が好きですよ
霜柱ふんでみようか地底まで
かりそめの恋に迷つて寒椿
涙とは光るものなり枯れ尾花
つれづれに大和魂探すかな

東京五季

加 茂 達 彌

元日のかくも重たき新聞紙
いくたびも影を踏まれて花の客
残花余花五体どこから芳らむ
玫瑰やむかしは沈みやすき艦ふね
日本を半里離りて見る花火
秋いまだ金管楽器の火照るなれ
妹よ秋扇は力まず遣ふもの
肝吸ふや二百十日の晴れわたる
日溜りや人は尾骨を隠したる
片仮名で書くフクシマの寒さかな

空の音

吉田香津代

国姓爺合戦ややつ玉葱に芽
街角や春の風邪引く予感あり
花の雨昼は昼のこころにて
春の月すり減りへりゆきし木の敷居
空叩く紙風船に空の音
陰膳や羽虫がぼつと春障子
閉じ蓋を開ける日永の右手かな
薫風や向こう岸へは櫓の舟で
竹皮を脱ぐ泣く子がふいに静かなり
太宰忌やビールの泡に泡の音

春浅し

北上政枝

白鳥来ふるさとへ耳研ぎすます
冬鷗荒磯の海へ海の音
おちこちに牡蠣殻の山寒波来る
明けやらぬ門灯の雪手で払う
汲み置きの水にさざ波冬紅葉
短日のしこしこと噛むスルメ烏賊
鬼やらい雲の厚みのぼつと割れ
野猪親子水音ざぶざぶ空へぬけ
羽化おえし心地するかな浅き春
それとなく物憂い時間冬芽生ゆ

桃の実

高 橋 龍

初 蛙 五 体 投 地 を ね む ぐ ろ に

赤茄子の腐れてゐるところより—茂吉に倣ひて

自 転 車 の た ふ れ て ぬ た る と こ ろ 百 合

引 返 す 鷹 も 見 ら れ て 伊 良 湖 崎

産 気 づ く 桃 ち ら ち ら と 山 野 か な

桃 の 実 は 意 識 の 流 れ さ か の ぼ る

干 柿 に 三 カ ラ ッ ト の 種 残 る

雪 尽 き し 圓つがる な 空 を 目 の 中 に

ニ ー ベ ル ン グ の 指 輪リング の 寸 法サイズ 直 す 七 草

楢ながまる 円 の 中 に 一 書 き 草 生 や す

渡 し 場 に 長 く て 長 い 棹 が あ る